

教 仁 名 聞

第 94 号
(発行日)

2018 年 7 月 1 日

発行所：真宗大谷派念佛寺
〒 6638113 西宮市
甲子園口 2 丁目 7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.onet.ne.jp

http://nenbutsuji.info/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月 2 日 午後 2 時始。

○ 〈念仏座談会〉

毎月 2 日と 12 日 午後 3 時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月 6 日 午後 7 時始。

○ 〈真宗入門講座〉

毎月 18 日 午後 6 時 30 分始。

* 8 月は 2 日の念仏座談会と 6 日の聖典学習会以外は休み。

首の飛ぶような念仏

宗祖親鸞聖人(以下、宗祖。

一一七三年〜一二六二年)が

京都に居られた時のことです。

師の法然聖人(以下、聖人。

一一三三年〜一二二二年)の

お膝元で浄土の教えを学んで

いた三十四歳頃のことです。

奈良・興福寺の僧衆が主と

なつて、(法然の教えは仏法で

はなく、逆に世の中を乱す邪

教であり、法然の門下には世

を乱す輩がいる。法然の念仏

を禁止し、そういう輩を処罰

すべし)と激しく非難し、何

度も朝廷に訴えました。

ついに一二〇七年二月に法

然門下の四人の弟子は死罪に

なり処刑されました。聖人と

有力な門下は流罪になり、師

の聖人は四国へ、宗祖は遠く

越後に流罪になりました。

そういう大事件(承元の法

難)に至る前の念仏弾圧の波

が起こりつつあった頃のこと

です。聖人の念仏の教えを排

除しようとする勢力が朝廷を

動かす機運になってきました。

ある日、弟子たちが聖人か

ら専修念仏の説法を聞いてい

た時、西阿という弟子がやつ

てきて、集まっている念仏の

同朋たちの前で、「かくのごと

くの御義ゆめゆめあるべから

ず候」と云いました。「今その

ようなお念仏の教えを談義し

てはいけません」と言い、そ

してお弟子方に向かつて「お

のおご返事申し給うべから

ず」で、「みなさんも師の説法

にうなずいてはいけません」

などと随分乱暴なことを言っ

たのです。それは教えを非難

したのではなく、聖人はもち

ろんのこと同朋たちの上に念

仏弾圧の禍が降りかかるのを

心配してのことでした。

これに対して聖人は「汝経

釈の文をみずや」で、「汝は浄

土の経文や善導大師の注釈を

読んでないのか」と問われま

したら、西阿は「経釈の文は

しかりといえども、世間の機

嫌を存ずるばかりなり」と答

えました。「そうした浄土の経

釈が大変尊いのは承知してい

ますが、今それを語りあうと、

* 法要の際、法名をご持参下されば仏前に安置させていただきます。

《 孟蘭盆会法要 》

八月十日 (金)

午後二時始まり

* * * * *

時の権力者からの大変な怒り
を買ひ、どのような災難がふ
りかかるかわかりません、そ
れをただ怖れて申し上げてい
るのです」と答えたのです。
そうすると聖人は非常に厳
しいお顔をなされて、

「われたとえ死刑におこなわ
るとも、この事いわずはある
べからず」

ときつぱりと断言されたので
す。「私はたとえつかまつて首
をはねられても、お念仏の法
を説かないわけにはいかない」
といわれたのです。法然聖人
のこの言動に「見たてまつる
人、みな涙をおとしけり。」で、

そこにいた人たちは聖人が死
を賭して仏法に生きておられ
るお姿に圧倒され、皆感激し
て涙を流したと伝えられてい
ます。聖人は仏法に自分のい
のち全体をかけておられ、私
たちにとって念仏はいのちよ
りも大事なことなのだと思っ
て厳肅にお示しになったので

した。この出来事はちやうど
宗祖が聖人の元に居られた頃
のことですから、実際の現場
に居られたかも知れません。
当然宗祖に強烈な感銘を与え
たのではないでしょうが。

こうした法然聖人の態度は
宗祖の生涯に影響を与えてい
ったと思います。宗祖の晩年、
関東で善鸞事件が起こり、関
東にいる宗祖のご門弟にたい
して京都からお手紙を出され
ています。関東のその地方の
地頭や名主などの権力者たち
が念仏を排除し、関東の念仏
者たちを弾圧するようになって
きた時、

「そのところの縁つきでおわ
しましそうらわば、いづれの
ところにも、うつらせたま
いそうろうておわしますよう
に御はからいそうろうべし」
と宗祖は仰せられています。
宗祖は権力によって念仏が
妨害されるなら、その土地を
離れて他の場所に移って生活

信心夜話

しなさいと事も無げに語っておられるます。

今まで生活してきた土地を

離れると云うことはその人たちにとって生活の基盤を失うわけですから一大事に違いありません。にもかかわらず、権力者によって妨げられて念仏を申すことが出来ないようになったら、その土地を離れて生きよと、何のためらいもなく仰る宗祖の態度の中に、法然聖人と同じく仏法を人生の第一義とする人生観（信念）をうかがうのです。

こうした話は、世間の権力に対して仏法に生きる者がどういう態度で臨むかという大きな課題への貴重な示唆を与える話です。

これは仏教だけのことではありません。真なる宗教は決して単なる教養とか修養とかこの世の生き方の方法というようなレベルのものではなくて、それがなくては人生そのものが無意味となるような真実性にかかわるものだからです。

法然聖人が首が飛ぶような念仏に生きた話と似た逸話がキリスト教にもあります。

キリスト教の宗教改革者の第一人者であったドイツのマ

ルティン・ルター（一四八三年〜一五四六年）に次のような話があります。

彼は当時の巨大な政治的宗教的権力をもっていたローマ教会の教義（免罪符などの）を批判しました。その頃、ローマ教会の教えに楯を突く者は異端視され、生命の保証はないという時代でした。

彼の説は異端であるということ、彼は皇帝カール五世の元でのウオルムスの国会に呼び出され自説を撤回するよりに強く迫られました。その時、彼は大勢の糾弾者の前で「我、ここに立つ。私はこうするより他ない。神よ、私を助けたまえ！」

「我ここに立つ」と叫んだ若きルターの態度は聖人の「われたとえ死刑にをこなはるるも、この事いわずはあるべからず」と好一対で、感動せざるを得ません。とうとうルターはローマ教会から破門され、司祭の地位を剥奪され、国内に於ける一切の権利を奪われしました（公民権剥奪）。

ひるがえって、近代の真宗学者の多くが戦前の日本の国家神道や暴力的な軍国主義に

対して、情けなくも抵抗できず沈黙するしかなかったとしても、著名な真宗指導者たちで国家神道の考えに添った主張をし、迎合し、時には推進するような発言をした人たちもいました。それによって真宗教団は弾圧を免れたのですが、法然・親鸞両聖人の態度とは裏腹です。

大体、この世間で地位や名誉や安定した収入があつて恵まれた境遇にいと、それらを剥奪されても自分の信念を貫くということは極めて難しいと思ひます。

この世での自由が奪われ身柄を拘束されても仏法に背くようなことを言わない、そういう真宗の指導者が戦前・戦中に幾人もいたなら、その後の真宗教団の姿は変わっていたことでしょう。

ただ戦前、国の教育方針が間違っていると文部省に直接談判をしに行った大谷派の多田鼎師（ただし昭和十二年没）や、多田師を尊敬し、その後政府への批判的な布教で憲兵に連行され鼓膜が破れるほどの拷問を受けた藤並天香師の

ような真宗人もいました。こういう真宗人も極くわずかでもいたことは嬉しいことです。

この問題は現代でも同じです。国家権力に逆らうと不利益になると見るや、国家の政策に批判的な言動を避け、迎合する方向へ傾く現代のマスコミや知識人の姿をよく見ます。

こういうことは、中国は言うまでもなくアメリカでもヨーロッパでも同じでしょう。

誰しも不利益や災難を避けて自分と家族の安全を守ろうとする思いが強いですが、人はいざというときにどういう態度を取るかはいつも問われていると思ひます。

法然聖人や親鸞聖人のような態度はなかなか取れないまでも、世の中がおかしい方向へ行っているということに敏感になり、何が正しいか、どこが間違っているかを見定めることのできるように学びを重ね、また人にも伝えていくこと、またそれによって選挙に際してどういう一票を投じるか、それは私たちでも可能なことだと思ひます。

(了)



仏法を随分たくさん聞き、たくさん仏書を読み、長年聴聞していても、なかなか信心が得られないという。その場合の一つの理由に、仏法を山ほど聞いていても、仏のお言葉を（重く聞いていない）ということがあるのではないか。どれほど仏法のお話を多くの先生から聞いていても、真宗聴聞の要であるアミダ仏の言葉、ことに第十八願のお言葉を「重く」聞いていない。第十八願は不可思議であつて、人間の知性で納得できて受け入れることのできるような言葉ではない。第十八願をとりつめて言えば「一声となえて往生す」（宗祖ご消息）る法である。「二声称えるばかりで、汝の一切の罪惡を除き浄土に生まれさせる」という阿弥陀仏の念仏往生の誓いである。絶対の大悲の勅命である。この誓いの言葉を、「他に一切道無し、今にも死すべき罪の身なり。この私を救うものありや、ご一言を」と、重く重く本願を聞くのである。軽く聞いていては百年聞いても耳を通過するだけである。

如来の光瑞希有にして

(和讃問答)

如来の光瑞希有にして

阿難はなはだこころよく

如是之義ととえりしに

出世の本意あらわせり

(浄土和讃)

現代語訳

(釈尊の常に異なつた光明の奇瑞はありがたく、その輝くみ姿を拝した阿難は、甚だ喜んで、何故かとそのいわれを問ひ奉つたので、釈尊はこの世に生まれ出た本意を説き現された。)

(語句)

光瑞希有——光瑞とは光輝く不思議なめでたいありさま。こころよく——心になつて、よろこばしいこと。

如是之義——このような尊いお姿になられたのには、どのようなわけがあるのかとお尋ねしたこと。

出世の本意——釈尊がこの世にお生まれになつた本意、目的。

* * *

N 「阿難はどういう方ですか」

D 「釈尊のいとこで、釈尊の弟子になり、(常随昵近の弟子)といわれるほど、釈尊に常に付き従つて釈尊の説法を親しく聞かれたお方です」

N 「(如来の光瑞希有にして)とは」

D 「如来すなわち釈尊のお身体が今まで見たことのないほど清らかで光輝いたということとです」

N 「(阿難はなはだこころよく)とは」

D 「これは阿難が光に驚いて(如是之義ととえり)で、

いわゆる(なぜ今日は今まで拝見したことがないほどお姿が清らかで光輝いておられるのですか)と釈尊に問われた、その問いにたいして釈尊は(はなはだこころよく)で、非常にその問いを快く思われた、ということとです」

N 「阿難が快いのではなく、釈尊が快く思われたということとですね」

D 「ええそうです。よくぞ尋

ねてくれたと釈尊はこの問いを喜ばれたのです」

N 「なぜですか」

D 「釈尊はだれかの質問とか何かのきっかけとかの縁があつて、説法をされたのです。

この仏説無量寿経の説法は阿難のこの問いを縁として説かれたのです」

N 「そしてこの無量寿経の説法が(出世の本意)なのですね。出世の本意とは」

D 「ええ、釈尊がこの世に

出ましになつて、いろいろな縁で説法をされましたが、釈尊自身がこの世にお出ましになつて説かねばならない、これを説くためにこそこの世に出て来られた出世の本意の経典、それが無量寿経であつて、(出世本懐の経)とも言われています」

N 「釈尊がこの世に出られたのはこの無量寿経の説法をするためだった、といえるのですね」

D 「ええ」

N 「釈尊の出世の本意といわれるほど、無量寿経には何が説かれているのですか」

D 「阿弥陀仏の本願です」

N 「なぜ弥陀の本願がそれほどの意味があるのですか」

D 「阿弥陀仏の本願は一切の衆生を平等に仏になること

できる不可思議な有難い法だからです」

N 「阿難の問いは弥陀の本願を説くきっかけを作つてくれたと、釈尊はよろこばれたのですね」

D 「ええ、そうです。そして又、(阿難)が問うたというところに意味があるのだといわれています」

N 「それはどういうことですか」

D 「実は阿難は釈尊に最も身近で釈尊から常に教えを受けていたのですが、他の弟子は次々と覺りを開いていきましたが、阿難はなかなか覺りが開けなかつたのです。仏教の言葉で言えばお弟子方の中では鈍根だつたといえるでしょう」

N 「釈尊に常に従つておられたにもかかわらず、いつまでたつても覺りが開けなかつたのですね」

D 「ええ、釈尊としては一切衆生がどうしたら眞實を覺ることができるといふ広大な課題とともに、身近には一番覺りを開いて欲しい弟子の阿難が覺れないという問題もあつたでしょう」

N 「すぐれたお弟子よりも、むしろ愚かな阿難、そして苦しみにあえいでいる民衆の救

いを常に課題としてもつておられたのですね」

D 「ええそうです。ところがある時、万人が助かるころの弥陀の本願の救いを感じ得されたのでありましょう」

N 「その本願を一切衆生の代表として、また凡夫の代表として阿難が問うたともいえるのでしようね」

D 「ええそうです。阿難への応答としての弥陀の本願は一切衆生への恵みであり、阿難の救いであり、ひいてはこの愚かな私の救いとして、釈尊は説かれたのです。それが仏説無量寿経であります」

(了)

〈遠方法話予定〉

○七月二十七日。名古屋市。高畑聞法会館。十時より法話・座談。

○七月三十一日。福井別院。第二組の暁天講座(午前六時)。午前

十時より座談。

○八月九日。広島市中区。圓光寺。午後一時半始。

○九月廿八日。札幌市白石区。昭念寺(興正派)。午前・午後

○十月四日。名古屋。高畑聞法会館。午前十時より法話・座談

○十月七日。福井市照手町。安居寺法話。

(詳しくは念佛寺にお尋ね下さい)

お便り

T・S氏からの便り

(T・Sさんの所感『木村無相師臨終法話注記』からの六月号よりの続きです。)

* * *

(果遂の誓い)

「定散自力の称名は果遂の誓いに帰してこそ教えざれども(他力)自然に真如の門に転入する」

ただ一回だけ「果遂の誓い」は働くだけのように思われるがそうではなく、一生果遂の誓願力はこの業煩惱の身に働き下さって千たび万たび「信後」に疑惑を起こしても「果遂の誓願力」のゆえに千たび万たびでも、真如の門にただ念仏定散自力の信の念仏の身に転落しても、果遂の誓いの誓願力は一生根気よくその果遂のお言葉通りにこの私を疑惑仏智を晴らしてくださいるのです。

ヒトタビ「ただ念仏の身に下された」ところに帰らされて下さるのであります。千たびでも万たびでも親に背き疑惑を信後に起こしてもお見捨てはないのであります。

(無相さんの手紙)

☆私思う。よくぞ土井師が無相師に「信後に疑惑アリやナシヤ」と問うてくださったものであります。この問いがなければ無相師の大説法聞かれずじまいでありました。正に、唯円大徳が親鸞聖人に「歎異抄第九条」で問うたごとく、土井師が「無相上人」に問うて下されたのです。この問いかけがなければ、仏法万年の間、竜宮に沈み閉じたままでありました。無相師の説法、天にとどろき地を震わすです。

私は、今まで「歎異抄九条」の意味がわからなかった。私はこの無相師の言葉がなければ永遠に理解できなかったでしょう。アアこのことであつたのかと。いろんな先生方の解説を読んでも何かしらしくりしなかつた。しかし無相師はなんと大胆におおらかに明快にお示しして下さいる。

我々は煩惱成就の人間である。これは死ぬまで煩惱成就させていただくのである。これがわが姿の真実相である。如是相である。こんな私に、故に、だけに、懸けられた本願名号であつたのだ。親鸞いわく、

「親鸞もこの不審ありつるに、

唯円房同じ心にてありけりよくよく案じてみれば天に踊り地に踊るほどに喜ぶべきことを喜ばぬにて、いよいよ往生は一定と思ひ給うべきなり。喜ぶべき心をおさへて喜ばせざるは煩惱の所為なり。しかるに、佛かねて知らしめして煩惱具足の凡夫とおほせられたることなれば、他力の悲願かくのごときわれらがためなりけりと知られて、いよいよたのもしくおぼゆるなり」

信後であつても煩惱は沸く。信前でも沸く。もちろん信前であつても同等に煩惱は沸く。煩惱に変わりはない。死ぬまで沸くのが我が煩惱の實相である。真実相である。煩惱が沸かなければ凡夫ではない。我らは死ぬまで煩惱を成就した身である。

この身ゆえの弥陀の本願である。この身に煩惱がなくなれば弥陀の本願無用なり。悟つても悟らなくても煩惱は死ぬまで我が身と一心同体であります。この身に弥陀の本願が南無阿弥陀仏となり給いて迷いに迷い疑惑に疑惑を起こしてもますます離れ給わぬのであります。疑惑迷い心配いらず、これ我が本性の真相なり。地獄一定のすわりに弥陀の本願がある。親鸞いわく。

「踊躍歡喜の心もあり、いそぎ浄土へまいりたくそうらわんには、煩惱のなきやらんと、あやしくそうらひなまし」

「これにつけてこそ、いよいよ大悲大願は頼もしく往生は決定と存じそうらへ」

自己の悪性が徹底されれば自覚されれば信心されれば、知らされれば照らされれば、弥陀の本願願心に自ずと頭が下がるのです。「本願のかたじけなさよ」と「常に御述懐さふらいしことを」であります。

我が煩惱と「本願のかたじけなさ」が離れぬに離れられない関係なのです。切つても切れない関係なのです。お前と俺とは同期の桜、地獄の底まで戦友なのです。信後であつてもこの原則は変わらないのです。信後に煩惱がなくなれば信心もなくなります。本願もなくなりません。信心は生きたこの煩惱にかかった生きた弥陀の本願願心大悲なのです。本願相応のわが機なのです。無信疑惑のわが機にかかった本願なのです。我に信心悟りというものがあれば弥陀の本願もなくなり救いもお助けもなくなりません。悪人正機、悪人正客といただくのも「ただ念仏して」弥陀の願心に照らされるからです。我が機に宿

業の自覚はありません。宿業の自覚ができない身と知らされたるが本願のお目当てなのです。ただ我身にはただ「本願のかたじけなさよ」があるばかりなのでしよう。

我が身に信心自覚というものがあれば仏法と真宗と永遠にお別れです。

一たび本願相応の願心念仏・本願相応の機と知らされれば、信後といえども千たびとも万たびとも、疑惑を起こしても自然に弥陀の本願願心念仏に帰らせていただけるのだとの心強いお教えです。二十願の「果遂の誓い」のなさせる功德か十八願成就の功德のなせる業かはわかりませんが、本願の仰せには悪も恐れずです。本願を妨げる悪も疑惑もありません。こんな素晴らしい言葉を吐ける人はないのでないでしょうか。法も機もただ弥陀の願心本願相応の世界の内なのです。正に無相師は還相の菩薩様であります。

(次号へ続く)

【お知らせ】

十月六日の共学会は

十月十日に変更します。

時間は午後七時より